

内氏等説ノ如ク唯其レ熱帯及亞熱帯地方ニ於テハ身体組織ノ抵抗力減弱シ殊ニマラリヤニ頻回感染セシモンニアリテハ著ルシク抵抗力減退シテ容易ニ細菌ノ侵入スル處トナリ而シテ鼠蹊腺部領域ニ於テハ身体中特ニ不潔ニシテアイテルエルレーグル侵入門戸ヲ發越シ安ク即チ主トシテ鼠蹊腺炎ヲ起ス所以ナリ余カ第二例及第三例ニ於テハ共ニ渡台後頻回マラリヤヲ患ヒタルコアリ特ニ第三例ニ於テハ著シキ惡液質狀ヲ呈セリ然レモ二例共ニ入院直前ニハマラリヤノ發作ナカリキ第一例ハ全ク確タルマラリヤノ既往症ナク又入院當時ニ於テ第一例及第三例ハ發熱アリシヲ以テ鏡驗セシカ數十枚ノ標本ヲ作りシモ遂ニマラリヤ原虫ヲ見サリキ思フニ絶對的マラリヤト本症ト密接ナル原因の關係ヲ有セザルモ其レマラリヤハ本症ニ對シテ一ノ特異質ヲ賦與スルモノナランカ之ヲ要スルニ所謂氣候性橫痃ハ氣候其ノモノ直接影響ヲ受ケテ身体組織ノ抵抗力減弱シテ乘シ普通發炎乃至其代謝產物吸收セラレ鼠蹊腺ノ炎症ヲ惹起セシモノナラン

療法 余カ三例ニ於テハ消散セシモノナク何レモ化膿ヲ來セシニヨリ切開セシモ肉芽發生良好ナラズシテ荏苒癒ハサリキ余ハ早期の切開ニ兼テ營養療法ノ尤モ可ナルヲ

信ズ特ニ轉地療法尤モ良好ナラン

Literatur

- Patrick Manson. Tropical Diseases.
- Scheube. Die Krankheitsender Warmenlander.
- Archiv fur Schiffs and Tropen-Hygiene Heft 2.1903
- Birch-hirschfeld. Pathologische Anatomie.
- 醫學博士會雜誌 明治三十二年發行

◎消化管異物ノ結果及稀有ト信ズル異物遊走ノ一例

千葉醫學專門學校「外科クリニク」ニ於テ

吉川春次郎

茲ニ記ス表題ノ一例ハ過ンテ嚙下シタル帽針ガ泌尿器系ニ顯ハレタルモノナリ。予寡聞ニシテ未ダ此種ノ出來事ニ就テ多クヲ聞カズ自ラ以テ稀有ノ症トナス乃チ此記述アル所以ナリ

嚙下セル異物ノ結果ハ素ヨリ其性質及機會ニ從ツテ一様ナラズ Eshold (1896)ノ記載ニ倣ハバ次ノ種類ニ歸ス

- 一 尋常ノ經路ニ依リテ體腔ヲ去ルモノ
- 二 消化管ノ切開術ニ頼リテ去ラル、モノ

三 消化管内ニ止ルモノ

四 不明ニ了ルモノ

五 消化管ヲ穿通シテ他ノ身體部分ニ出ルモノ

嚥下セル諸多ノ異物ガ何等ノ障礙ヲ與フルコトナク若クハ僅微ノ症徴ヲ呈スルノミニシテ直腸ヨリ排泄セラレ、コトハ去來幾多ノ例證アリ、Nussbaum (四個ノ水夫用小刀、三「ツオル」半ノ粘土製笛、銀製肉叉、稍々大ナル硝子破片、書翰容レ等) Bloch (長キハ五仙迷ニ達スル尖銳圭角有ル硝子片百五十七、百〇二箇ノ眞鍮製帽針、一大片ノ鉛、眞鍮製ノ靴螺旋及三箇ノ幕鈎)ノ古キ例ハ人ノ善ク知ル所ニシテ、爾今之ニ屬スル實驗例ハ枚舉ニ違アラズ、諸種ノ針、釘、竹片、木片、匙、肉叉、鉚、鈕、骨片、義齒、石塊、錢貨等皆能ク消化管ヲ通過シ得タル例ヲ有ス、輓近同窓鈴木重郎氏ガ過失ニ因ル自己ノ實驗ヲ報告セラレタル者(明治三十七年)ハ亦興味アル一例ナリ、即一七〇五仙迷ノ銅線ヲ治療上鼻腔中ニ挿入セル間過テ嚥下シタルモノ、第六日排便ト共ニ排泄セラレタリ、此間些ノ自覺症ナカリシト云フ、之ト同様ノ例ハ佐藤達次郎氏(明治三十五年)ノ語リシモノニシテ、同シク鼻疾患ニ藥物ノ塗附ノ爲ニ挿入セル一五仙迷ノ竹桿ヲ過リ嚥下シ

タルモノ第十二日直腸ヨリ排泄セラレタリト云フ、排泄物ニ伴ヒテ消化管ヲ去ルノ他自然ノ經路ヲ去ルハ逆行シテ消化管上口ヨリ排出スルモノナリ、即胃及食管内ニ存在スル異物ガ嘔吐ト共ニ排泄セラレ、モノトス安藤正覺氏(明治三十二年)ハ胃擴張患者ニ治療上用井タル子ラトン氏消息子ヲ嚥下シタルモノ後嘔吐ト共ニ排泄セルヲ報告シタリ

林暉氏(明治三十三年)ハ食管上部ニ箱頓セル二錢銅貨ヲ頸部ヲ下垂セシメ指頭ヲ以テ去ラント企テ嚙囉仿謨麻酔ヲ行ヒシニ嘔吐ヲ催シ之ニ因リテ異物モ共ニ除去セラレタル例ヲ語レリ

以上ハ自然的ニ食果ヲ得タル二三ノ例ナルモ、此他殊ニ食道ノ異物ニ於テハ諸種ノ手段ヲ策シ特種ノ器械ニ頼リテ尋常開通路ヨリ摘出セルモノ少ナカラズ新シキ例ハMayon (1902) ノソレニシテ嚥下シタル針ヲレントゲン光線ニテ目撃シテ、食道消息子ニ裝置セル磁石力ヲ以テ胃中ヨリ取り出シタル一例トス

茲ニ附記ス可キハ Kopezhinski 氏 (1904) ノ報告シタル例ニシテ、食道瘢痕狹窄ニテ人工胃瘻ヲ有セル者過テ食道消息子ヲ落下セシメシガ幸ニ瘻孔ヨリ除去シ得タリト云

フニアリ
 消化管腔ノ切開ニ賴リテ除去セラルモノトハ、即食道
 上部ニ於テハ頸部ヨリ切開ヲ行ヒ、食道下部及胃ニ於テ
 ハ胃切開術ヲ施シ、腸管ニアリテハ腸管切開術ヲ施ス等
 是レナリ、頃者防腐法ノ着々理想ニ近ヅキ能ク危険ヲ避
 ケ得ルニ到リ、加フルニレントゲン光線ノアルアリテ、
 或種ノ異物ニ於テハ其部位ヲ知ルニ著シキ便ヲ得セシメ
 タル以來、外科手術家ノ爲ニ此種ノ手術ノ行ハルルコト
 愈々多キヲ加ヘタリ、試ニ胃ノ異物ニ就テ記載ヲ索メン
 カ、其多數ハ主ニ胃切開術ヲ告ゲンガ爲ナルヲ見ル可シ、
 予ハヨリ多ク茲ニ之ヲ語ラザル可シ、只 P. Krause 氏ガ
 一九〇一年 v. Bruns 氏ノ三例ヲ加ヘテ異物ニ對ツテ胃
 切開術ノ行ハレタルモノ七十一ナル數ヲ示シタルコト、
 及 Mathis 氏 (1903) ガ二一仙迷ノ小刀ヲ胃中ヨリ去リ
 テ良果ヲ得タル第一回ノ例ト、我橋本博士 (1919) ガ既ニ
 胃壁ヲ穿貫セル房楊子ノ剔出ヲ企テタル例トヲ記牒セン
 トス
 異物ノ消化管内ニ止ルハ、粘膜皺襞ニ簪入シ、又ハ盲腸、
 蟲樣突起中等ニ進入シ長ク此所ニ止ルモノ有リ、又大ナ
 ルガ爲メニ管腔ヲ通過シ得サルモノ、尖銳ニシテ壁ニ刺

入スルモノ及重量ノ爲メ腸胃ノ運動ニ影響ヲ被ラザルモ
 ノ等トス、サレド茲ニ消化管中ニ止ルモノハ、全ク無害ニ
 永久生體ト運命ヲ共ニスルモノ、謂ニシテ、其小ナルモ
 ノハ不明ノ中ニ排泄セララル、モノモ多ク之レアルベク、
 又異物ノ大小ヲ問ハズ往々消化管ニ停在ノ間多少ノ日月
 後諸多ノ不良ノ結果ヲ醸シ切開術其他ノ方法ニ俟チテ除
 去ヲ企テラル、ニ至ルモノアリ、他ノ手術ニ際シ偶然異
 物ヲ發見スル如キハ消化管内ニ止リシモノトシテ算スル
 ヲ得ベシ
 E. J. Fisher 氏ハ歇爾尼亞切開術ニ際シ偶然其中ヨリ一
 五仙迷ノ骨片ヲ見出シタルコトヲ報ゼリ、氏ハ此ノ種ノ
 二十六例ヲ集メタルガ、其中十五回ハ骨片、四回ハ果
 實種、二回ハ魚骨、三回ハ針ナリキト
 竄入セル消化器異物ノ不明ニ了スルモノトハ、無害ニ身
 體中ニ止レルカ或ハ不明ノ中ニ排泄セラレシカ明ナラザ
 ルモノナリ、身體中ニ潛居スル者ノ一部ハ管腔中ニ止ル
 モノニシテ、一部ハ無害ニ管腔ヲ穿貫脱出シテ他ノ身體
 部分ニ遊走セルモノニシテ次ノ種類ニ歸ス
 殘ル消化管異物ノ一ノ結果ハ消化管ヲ穿通シテ他ノ身體
 部分ニ出ルモノニシテ、其消化管ヲ脱スルヤ被膜ヲ以テ

被ハレ全ク無害ナルコトアリ、或ハ内臓ノ癒着ヲ招クコトアリ、穿破シテ局部所性膿瘍ヲ形成スルコトアリ、廣汎性腹膜炎ニ陥ラシムルコトアリ、消化管ヲ脱出シテ腹腔内ニ止ルコトアリ、進シテ他ノ器官ニ竄入スルコトアリ、體壁ニ出ルコトアリ、而シテ他器官ニ侵入シ或ハ體壁ニ穿出スルヤ初メ癒着ヲ形成シテ後脱出スルコトアリ、或ハ殆ド變化ヲ呈セズシテ移行スルコトアリ
 今異物ガ消化管腔ヲ穿破セシ爲ニ來リシ障礙ニ就テ過去ノ記載ノ數種、及管腔外ニ遊走セル例證ノ二三ヲ摘録セ

- 要スルニ消化管異物ノ障礙ハ主トシテ機械的ノモノ即創傷ト、之ニ續發スル炎症機轉ヨリ成ル管腔壁ノ損傷、之ニ因ル出血、刺入ノ爲メ若シクハ壓迫ニ因ル壞疽ノ爲ニ管腔壁ノ穿破、粘膜炎加答兒、其部位ニ從テ消化管ノ周圍炎等ヲ來ス可ク、癒着、膿瘍、腹膜炎ニ就テハ既ニ記セリ、盲腸部ニ於テハ諸種ノ盲腸部炎ヲ形成ス可ク、又食管異物ノ穿破ニ因リテ肺壞疽ヲ來シタル例アリ、往々異物ハ核トナリテ糞石ヲ形成スルコトアリ、如斯結果ハ屢々異物嚥下後直ニ發スルモノナルモ、時ニ又若干ノ年月潜伏シ、後日突然或ハ或誘引ノ爲ニ此等ノ諸症ヲ發スルコトアリ
- 一 林暉氏(明治三十三年)一葉片ヲ嚥下セシモノ、大部分ハ吐出セラレ、一部ハ魚骨鉗子ニ頼リテ除去セラレシモ、後二ヶ月、前頸部舌骨ノ左側ニ於テ膿瘍ヲ形成セリ、之ヲ切開セシニ後排膿ト共ニ、二仙迷長ノ藁片ヲ得タリ
 - 二 永尾治身氏(明治三十六年)一患者雜草ノ穗莖ヲ嚥下セシモノ右側下顎隅角部ヲ切開シテ摘出セリ
 - 三 F. Hohnsater (1903) 食管ニ小骨ヲ刺セル患者、後五日、甲狀腺ト甲狀軟骨間ニ形成セラレタル膿瘍ヲ開キ異物ヲ除去セリ
 - 四 Akowalski (1895) 一患者鷄骨ヲ嚥下セシモノ、肺動脈ヲ穿孔シ大出血ニ因リテ死亡セリ
 - 五 Robert, Hecht (1898) 縫針ヲ嚥下シ、後胃部ニ劇痛アリ、第三日胃切開術ヲ行ヒ、二本ノ壁ニ刺入セルモノヲ除去セリ、後更ニ一本ヲ直腸ヨリ、一本ヲ便中ニ得タリ
 - 六 橋本博士(1876) 鹽嗽ノ際房楊子ヲ嚥下シ、二日ノ後疼痛ヲ發シ、第八日開腹術ヲ行ヒシガ、時既ニ異物ハ胃壁ヲ穿貫シ、臍ノ左方二仙迷ノ部ニ穿入セリ、術後腹膜

炎ニテ死亡、異物ハ一ハ仙迷ヲ算セリ

七 Dieque (1900) 六ヶ月前針ヲ嚥下セシガ、今腹部ニ球形ノ腫物ヲ生ジタリ、切開シテ胃、腹壁ノ癒着セル中ニ針ヲ藏セルヲ剔出セリ

八 Halliwell (1899) 四、五仙迷ノ帽子針ヲ嚥下セシガ、腸骨窩部ニ於テ疼痛ヲ發シ、第五日開腹セシニ、針ハ全然胃壁外ニ刺出セラレ腹腔ニ露ハレ、其頭部ノ帽球ノミ胃中ニ止レリ、由テ露出部ヲ切除シ去レリ、後十數日殘餘ノ部分ハ便ト共ニ排泄セラレタリ

九 Rumpf-Graff (1897) ノ記載セル例ノ一ハ肝膿瘍ノ疹狀ニテ死亡シタルヲ解屍シテ蟲様垂中ニ潛居セル針ヲ發見セリト云フニアリ

一〇 J. Ball (1602) ハ長ク潜伏シタル腸管内異物ガ誘引ノ爲メ穿孔セル好キニ二例ヲ報告セリ

其一ハ、六歳ノ男子ニシテ、下腹部ニ衝突ヲ受ケシガ、後二日、腹壁ノ疼痛及嘔吐アリ、切開シテ蟲様突起ヨリ一ノ針ヲ得タリ、壁ハ穿孔セラレ異物ハ大部分壁外ニ在リ、其二ハ、二十二歳ノ女子ニシテ、下腹部ニ衝突ヲ受ケシガ、後二日、下腹ノ劇痛及嘔吐ヲ發セリ、症後三十八時間開腹術ヲ施ス、腹腔ハ膿ヲ以テ充タサレ、盲腸部

ニ抵抗アリ此部ヲ開キテ直徑二分ノ「ツォール」ノ膽石ヲ得タリ

一一 林暉氏(明治三十二年、三十四年)精神失常者ノ諸多ノ異物ヲ嚥下セシモノ、後右腸骨窩部ニ形成セラレタル硬結ヲ開キテ、腹腔中ヨリ錐ヲ見出セリ、其一端ハ腸管中ニ在リキ、後二ヶ月又臍部ノ左方ニ硬結ヲ發シ、開キテ復銀簪ヲ得タリ、此患者ハ斯クテ一旦治ニ就キシガ、後二年右大腿内股ニ於テ硬結腫起ヲ發シ、劇痛ヲ訴ヘ行步全廢セリ、此部ヲ開キテ四箇ノ異物(日本帆船ニ使用スル帆綱切斷刀一、鋼鐵造眼鏡支柱二本、及其關節部)ヲ得タリ、異物ハ悉ク集簇シ内股筋間ニ存在シ恰モ癭狀ノ肥厚シタル結締織ヲ以テ被包セラレ、僅ニ膿汁ヲ混ジタル不良肉芽ノ裏ニ在リ、異物ヲ除キタル空洞ハ前年ノ手術癩痕部ニ達スルモ既ニ腸管ニ交通セズ之ニ因テ考フルニ該異物ハ前年手術ノ際ニハ猶上部ニ在リタルモ、前回退院後體動ニ因リ漸次創口ニ達シ再ビ皮下ニ竄入シタルモノナル可シト

一二 横山龜代松氏(明治三十六年)五月廿一日、一兒過テ長一二仙迷ヲ算スル提灯骨ノ細竹ヲ嚥下シ、當時別ニ症狀ナカリシガ、六月中旬入浴時過テ頭倒シ、右季肋部

ヲ打撲セリ、後此部ニ膿瘍ヲ形成セリ、七月十七日切開シテ中ニ前記ノ異物ヲ藏セルヲ摘出セリト云フ、前記「Bell」ノ例ト酷似セルモノト云フ可シ

一三 Rumpf-Graft (1897) 三十年前針ヲ嚥下セシガ、此長日月ノ後吐糞症ヲ起シ、開腹術ヲ行ヒシモ、死亡セルモノ、解剖ニテ右腸骨窩部ノ膿瘍中ヨリ針ヲ得タリ

一四 Rumpf-Graft (1897) 針ヲ嚥下シ後三ヶ月、盲腸炎ノ症狀ヲ發セシガ容易ニ治シキ、然ルニ後復タ腹膜後部ニ於テ膿瘍ヲ形成セリ、切開シテ中ニ白豆大ノ硬固ナル糞石ヲ見出セリ、而シテ此糞石ハ中ニU字形彎曲ヲ呈セル針ヲ有セリ

一五 Rumpf-Graft (1897) ノ猶一ノ針ノ例ハ右側腹部ノ腫物ヲ開キ中ニ一二仙迷長ノ針ヲ得タルモノナリ

一六 Graft (1897) 四年前凡ソ百二十本ノ針ヲ嚥下シ、一部ハ常經路ニテ去リ、一部ハ直ニ開腹術ヲ行ヒテ去リシガ、後臍部ニ腫物ヲ發シ切開セシニ之レ小腸蹄係ノ結束セルモノニシテ中ニ一四仙迷長ノ針ヲ有セリ

一七 Tzibikg (1895) 十七年前嚥下セル骨片腹壁ニ膿瘍ヲ形成ス、切開シテ異物ヲ去ル

一八 L. Dentu (1901) 二七仙迷長ノ木匙ヲ嚥下セシモ

ノ、四十三時間後開腹術ヲ施セシニ異物ハ既ニ腹腔中ニ在リ、而シテ胃壁ニ穿孔部ヲ見ザリシト云フ、氏ハ之ヲ以テ先ヅ漿液膜下ニ侵入シ、次デ腹腔中ニ脱出セシモノナラント推定セリ

一九 Czanny (1895) 三週前、齒間ニ置キタル留針ヲ誤テ嚥下セシガ、爾後胃部ニ疼痛ヲ發シ、壓迫、步行、動作時等劇痛アリ、左前胃壁ニ異物ノ刺入セシモノナラント診斷シ切開術ヲ行ヒシニ、胃前下壁ニ於テ幽門近部ニ當リ、中央ニ血點アリ硬固ノ浸潤部アリ、之ヲ開バ、此刺管ハ終ニ胃中ニ達セリ、而シテ胃中ニハ針ヲ得ズ、隣接網膜部ノ淋巴腺軟々腫脹セリ、胃創、及腹壁創ヲ縫合セリ、爾後何等ノ障礙ヲ起サズ

二〇 近藤與十氏(明治三十三年)動物骨ヨリ製セル絹絲ヲ計ル秤ノ柄長サ約五寸ノモノヲ嚥下セシガ、後十五六時、氏ハ之ヲ診査セシモノニシテ、當時既ニ會陰正中線ニ於テ稍々左方ニ偏シ壓迫ニ因リテ抗抵強キ部アリ、指ヲ直腸ニ入レシニ此部ヨリ左上方ニ斜ニ走ル棒狀ノ硬結物ヲ直ニ直腸外ニ觸知シ得タリ、此棒狀ノモノハ上行ト共ニ直腸ヨリ遠カリ終ニ觸レ得ザルニ至ル隆起セル皮膚層組織ヲ切開シ異物ヲ抽出シ全治セリ、氏ハ之ヲ其時間ガ

全消化管ヲ通過セシモノトシテハ餘リニ短キト異物ノ位
置ヨリ推測シテ異物ハ胃ヲ穿貫シ全ク無害ニ此部迄下降
セルモノナリトセリ

二一 Ottoノ例、一婦人三年間ニ身體ヨリ三百九十五ノ
嚙下シタル縫針ヲ摘出シタリト云フモノ、及ビ

二二 Elliotノ例、一精神病ノ少女ニ於テ大約千箇ノ嚙下
シタル縫針ヲ腹腔及身體各部ヨリ摘出シタリト云フモ
ノ、其ニ予ハ其詳細ナル記載ヲ得可ク大ニ希望スルモノ
ナルモ、其果ス能ハザルヲ遺憾トス

高橋教眞氏(明治三十六年)、二十餘年間身體中ニ潜伏セ
シモノトシテ、二十九歳ノ女子ニ於テ身體諸部ヨリ多ク
ノ縫針ヲ出セリトノ珍奇ナル出來事ヲ報告シタリキ、然
ルニ後同患者ヲ擔任シタル荻原長藏氏ハ、其自ラ身體ニ
外部ヨリ刺入セシ者ナルヲ記セリ、予ハ荻原氏ノ説ク所
ニ從フモ猶且特種ノ興味アルモノト信ズ、由テ此ニ附記
ス

以上二十餘、異物ニ因リテ招カレタル消化管ノ損傷及炎
症機轉ノ續發竝ニ異物ノ遊走ニ就テ幾多ノ例證中略其各
種ヲ盡セリ、Kranzle (1901)ハ異物ニ於ケル胃切開術七
十一回ヲ集メタルガ、其中次ノ統計ヲ記セリ、曰ク胃壁ト

腹膜體壁板ト癒着アルモノ三十一回、此記載ナキモノ十
八回、前腹壁ニ膿瘍ヲ形成セシモノ六回、刺入ト穿孔ノ
二三ノ例アリ、死ノ轉歸ヲ取リシ二回ハ共ニ己ニ腹腔内
ニ穿孔セシモノナリキト

Exner (1903)ハ消化管内ニ於ケル尖銳ナル異物ノ豫後
ヲ調査シ、三十五回ノ硝子片ノ、二十二回ハ無害ニ排泄
セラレ、其八回ハ死亡シ、針及釘ノ百五十四例中、二十
八人(一八・二%)ハ死セリト報ゼリ

以上ハ消化管異物ノ行衛ニ就テ記述セシモノナルガ、茲
ニ又興味アルハ、消化管ニ由來スルモノニアラマシテ身
體中ヲ遊走スルモノナリ、膽石ガ膽嚢ヲ破リテ腹腔中ニ
遊離スルハ往々之ノ有ル所ニシテ、又内臟手術ノ過失ト
シテ埋没セシメタル綿紗片及止血鉗子ガ腸管内ニ竄入シ
タルコアルハ吾人ノ聞キシ所ナリ、如斯異物ノ遊走ハ膀
胱ニ於テモ亦致シ得ルモノナリ、腎臟ヨリ來ル或ハ膀胱
自己ニ形成セラル、膀胱結石ヲ除キ、膀胱ノ異物ハ、一ハ
外尿道口ヨリ來リ、一ハ腹壁及膀胱壁ヲ破リテ來ル(銃
創刺創)、他ノ一部分ハ即チ他ノ臟器ヨリ由來スルモノナ
リ、即臍ベツサル及臍「タンボン」ガ膀胱腔中隔ヲ穿孔シ
テ膀胱異物ヲナス如キ、骨盤骨瘍腐骨片ノ膀胱内竄入ノ

如キ、又卵巢皮様囊腫ノ内容(毛髮、齒牙)ガ膀胱中ニ被
開シ、尿道ヨリ毛髮ヲ排泄スル奇症ヲ致ス如キ、或ハ死
胎ノ遺骨ガ膀胱ノ異物ヲナスガ如キ、此著シキ例ヘ我井
上教授(明治二十四年)ノ古キ記載トス、即數年ヲ經過セ
ル死胎兒ノ遺骨ノ多數骨片ガ、膀胱、直腸及腔ヨリ排泄
セルヲ報告セラレタルモノナリ、他ノ一ハ消化管ノ異物
ガ去テ膀胱ニ穿入スルモノトス、其法一ハ先相互管腔ノ
癒着ヲ形成シ後穿破スルモノニシテ、一ハ遊離シテ遊走
シ來ルモノトス、予ノ茲ニ記サントスル一例ハ實ニ之ニ
屬ス、即嚙下セル異物ガ泌尿器内ニ顯ハレシモノニシテ、
其異物ハ實ニ針ナリ

消化器異物トシテ針ハ亦前記種々ナル場合ヲナシ得、其
例ハ前條ニ記セリ、予ハ今 V. Bruns ノ一例ヲ尖銳ナル
異物ノ好例トシテ此ニ引キ、次テ予ノ見タル例ヲ記載セ
ントス

V. Bruns (1901) 二十四歳ノ女子、三年前鬱憂症ニ罹リ
諸多ノ異物ヲ嚙下セリ、後留針及釘ノ各一本及一箇ノ鈕
鈎ヲ排泄シタルヲ記憶スト語レリ、レントゲン光線ニテ
多數ノ異物ヲ認メ、開腹術ヲ行フ、體壁腹膜ト胃底トノ
癒着、及膽囊部ニ於ケル肝胃ノ癒着ヲ剝離シ、後胃切開

ヲ加フ、胃腔ニ於テ二箇ノ連レル鈕鈎、及他ノ三箇ノ鈕
鈎、及四箇ノ釘及二箇ノ針狀小鐵片ヲ得タリ、十二支腸
ノ前後壁ニ於テ斜ニ刺入セラレタル針及鈕鈎ノ各一箇胃
底ニ於テ噴門ノ近部ニ二箇ノ鈕鈎、八本ノ釘及一ノ針狀
小鐵片、又終ニ下行結腸ニ刺入サレタル一箇ノ針ヲ得タ
リ、此除去セラレタル異物ハ胃液ノ作用ニテ強ク變化セ
リ、即初メ平坦ニシテ光輝アリシ者、今ハ黑褐色ヲ呈シ
表面ハ粗糙ニシテ其ノ末端ハ消耗セリ、此患者ハ不幸ニ
シテ鬼籍ニ入レリ、解屍ノ際横行結腸中ニ三本ノ針、直
腸ニ一本ノ針、上行結腸ニ於テ一本ノ釘、其或者ハ管壁
ニ刺入セシモノヲ得タリ、又下行結腸ノ中央ニ於テ兩端
共ニ壁ヲ穿貫セル針ヲ有セリ
予ノ一例

千葉縣千葉町

大 ○ 友 ○

十六年

患者ハ理髮練習中ノ男子ナリ
三十七年七月九日初診
既往症 七月三日午後五時頃、長一寸許ノ帽針ヲ以テ齒

垢ヲ除去中、過テ之ヲ嚥下シ、初メ食道上部ニアリシ如ク感セシガ、今ハ下リテ胃中ニアルモノ、如ク、胃部ニ壓痛アリト云フ、便通毎日一行整然タリト

現在、症 體格榮養共ニ中等ノ男子、一見憂慮ノ狀アリ、正中線ヨリ稍々右側ニ偏シ胃部ニ壓痛アリ、食思不振ヲ訴フ、他ニ胃腸症狀無ク、又心肺ニ異變ヲ認メズ、レントゲン光線検査ニテ得ル所ナシ

今後ノ經過ヲ見ル可ク特別ノ處置ニ出ルコトナクシテ歸宅ヲ命ズ

同年十月八日再診

初診後、經過 患者及其兄ノ語ル所ニ據レバ、七月診ヲ受ケテ歸宅後、同一部分ニ壓痛アルコト十餘日、後消失シテ復異常ナカリキ、然ルニ一ヶ月程前ヨリ、初メ肛門ノ直前即會陰部ニ當リテ時々微痛ヲ訴ヘタリシガ、若干日經過ノ後、尿道出血ヲ見ルニ至レリ、即排泄尿終末ニ當リテ二三滴ノ鮮血ヲ漏セリト云フ、但シ排尿及尿ニ變常ヲ認メズ、只排尿時前記ノ疼痛増劇スト云フ、患家ハ之ヲ以テ痲毒ニ由來スルモノトナシ、或賣藥ヲ内用セシモ治ニ就カズ、只出血ハ初發來十日許ニシテ跡ヲ斷テリト、患者ハ之ヲ嚥下セシ帽針ノ此ニ墜下シタルモノナラ

ントナシ乃チ來院セルモノナリ

主訴 會陰部ノ疼痛、安靜時ニハ全ク感ゼザルモ歩行ニ際シテハ勿論微動ニ際シテスラ刺様疼痛アリ、昨今此疼痛ハ漸次前方ニ向テ轉位スルモノ、如ク、今日ハ陰莖根部下面ニ於テ感ズ

現在、症 訴フル所ノ自覺症ノ他ニ異常ヲ語ラズ、試ニ排尿ヲ命ズレバ能ク線狀ニ排出シ終末マデ變調ナキモ、果シテ疼痛ノ増劇スルモノ、如シ、尿ハ尿道系等無ク、異常成分ヲ含マズ、陰囊部尿道ヲ指壓スルニ、此處ニ疼痛ヲ訴ヘ、強壓ヲ加フルヲ許サズ、尿道金屬「ブージー」ヲ挿入スルニ、亦同部ニ於テ疼痛ヲ訴フ、但シ何物ノ觸ル、ヲ感ゼズ、強テ少シク押シ進メ膜襌部ニ到達セシモ猶異物ノ認ム可キモノヲ觸レズ、疼痛愈々劇シキヲ以テ「ブージー」ヲ去ル、心肺ニ變調ナク又消化障礙ナシ

處置 局處ニ「イヒチヤール」軟膏ヲ貼シ、爾今ノ經過ヲ見ル可ク諭シテ歸宅セシム

十月八日後ノ經過

十月九日 疼痛ハ同一ナルモ昨日「ブージー」挿入後、其部位會陰縫線後端部ニ退キタリト云フ、此日再「ブージー」診査ヲ試ミタルモ觸ル、モノナク、陰囊後部ニ達ス

ルヤ劇痛ヲ訴へ、之ヨリ進ム能ハズ
十月十日ヨリ同十五日ニ至ル、疼痛較々緩快セル如キモ著シキ差異ナシ

十月十六日 患者來テ語ラク午後二時、頓庭前ニ於テ散步時、常ノ如ク局部ノ刺痛ヲ覺エツ、アリシガ、會々尿意ヲ催シタルヲ以テ、自ラ異物ノ流出ヲ促サント計リ、劇シキ疼痛ヲ忍ビ、肛門直前部ヨリ會陰線ニ沿ヒテ前方ニ向ヒ強擦ヲ加へ、後排尿ヲ試ミシニ、元來ノ疼痛部ヨリ前方ニ於テ尿路ニ觸ル、モノアルヲ自覺シ、大ニ喜ビ尿ヲ注意セシニ、排尿ノ半ニ至リテ何物カ外尿道口ヲ去ルモノアルヲ感ゼリ、由テ地上ヲ檢スルニ黑色ノ小桿ヲ得タリ、熟視スルニ正ニ針ノ帽端ニシテ其長約半仙迷ヲ算セリ、全部淡黑色ヲ呈シ只拆端ノ中心ニ於テ僅ニ灰白色光輝ヲ放ツ部分アリ、試ミニ鑷ヲ以テ其斷端ヲ摩擦セシニ果シテ金屬ニシテ薄キ黑環ヲ繞ラセル白色光輝アル面ヲ顯出セリト、異物ヲ問ヘバ不注意ノ爲メ遺失セリト云フ、疼痛ハ猶前日ト異ナルコトナシ、事實ヲ確カメントテ書テ家人ニ送り眞偽ヲ問ヒシニ答フル所總テ患者ノ語ルト同ジ
十月十七日 疼痛依然

十月十八日 顔貌不穩行步更ニ困難ナルモノ、如シ、今朝來疼痛ノ忍ビ難キ増惡ヲ語リ、切開剔出サレンコトヲ乞フ、「ブーシー」ヲ挿入シ膜様部ニ於テ鑷性異物ニ觸レシヲ感ゼリ、此瞬時劇甚ノ刺痛ヲ訴フ耐久能ハザルモノ、如シ、尿道外切開ノ後療法煩擾ナルコト、及小ナル異物カ必ズ摘出セラル、コトノ疑ハシキコト、恐ラクハ殘餘部分モ早晚尿ト共ニ排泄セラル可キヲ告ゲ、猶若干日延期スベシト語り、歸宅ヲ命ズ。

十月十九日ヨリ同二十一日ニ至ル、自宅ニ於テモ常ニ器中ニ排尿ヲ命ズ、何物ヲモ得ズ、疼痛ハ爾來甚々減退セシモ猶忘ル、ニ至ラズ

十月二十二日 例ノ如ク硝子器中ニ排尿ヲ命ズ、放尿中患者ハ異物ノ前進スルヲ訴ヘシガ、終末ニ當リ、果シテ黑色ノ一小桿ヲ器中ニ排泄セリ、採テ之ヲ檢スルニ實ニ小金屬桿ナリ、太サ尋常帽針ニ適シ、長四密迷、表面ニ黑褐色ヲ呈シ、一般ニ粗糙ナリ、兩端亦暗色ヲ呈シ、此ニ鑷擦ヲ加ヘシニ白色光輝ヲ發セリ（今猶保存ス）、疼痛依然タリ
十月二十三日ヨリ十一月二十三日ニ至ル、疼痛持續ス、記ス可キ變化ナシ、十一月六日入院

十一月二十四日、全身麻酔ノ下ニ尿道外切開術(筒井教授)ヲ施シ疼痛アル部分ニ於テ異物ノ有無ヲ檢スルニ異物ヲ認メズ

手術後創口ハ漸次縮小シ、疼痛ハ全然消失シ全ク去來ノ苦痛ヲ忘ル

※ ※ ※ ※ ※

予ノ一例ニ就テノ記事ハ茲ニ盡ク、予ハ之ヲ以テ嚥下セル帽針ガ消化管ヲ脱出シテ尿道内ニ達セシモノト信ズ、二回ノ針片排泄(其一回ハ實ニ予ノ自撃セシ所)ノ事實ハ異物ノ尿道ニ籍在セシヲ疑フノ餘地ナカラシム、只其由來ニ就テハ少シク考察セザル可カラザルモノアリ、他ナシ、外尿道口ヨリ異物ノ挿入ヲ企テ、之ヲ尿道後部若シクハ膀胱内ニ送ルノ事實ハ聞ク所ナレバナリ、然レテ予ハ四ヶ月前一度同異物ノ嚥下ヲ訴ヘ來リシ本患者ニ於テハ、單ニ此點ノミヲ以テスルモ、其由テ來ル所外尿道口ニアラザルヲ信ズ、其粗糙ニシテ黒變セルハ胃液ノ作用ト見做ス可ク、V. Brunsノ例ヲ想フ可シ、其何ニ因テ細折セラレシカハ、其腐蝕ノ結果脆性トナレルモノニ屢々患者ガ加ヘタル強壓ニ歸スルヲ得可キカ、消化管ノ穿孔部位及泌尿器ヘ進入ノ部位ニ就テハ、直チニ胃ヨリセシ

カ、將タ腸管ノ或部分ヨリセシカ、直ニ尿道周圍ヨリ尿道中ニ顯ハレシカ、將タ先ヅ膀胱ニ入りテ次デ尿道ニ下リシモノナルカ、之ガ推測ヲ下ス可ク予ハ一ノ根據ヲモ有セズ

切開術ヲ行フニ當リ素ヨリ異物ノ存在ヲ信セシムルニ足ルノ確微アリシニハアラザルモ、亦全ク之ヲ否定スルノ點ヲモ發見セザリキ、彼ノ排泄セラレタル二箇片ノ全長ヨリ察スルニ、少ナクモ一仙迷ノ殘餘ヲ存シ得可シ、(若シ患者ノ注意ヲ惹起セザルノ間ニ何處ヨリモ排出セラレタルコトナシト假定スレバ)然レモ今ニ到ルモノ二片以外ニ針ノ斷片ヲ發見セザルト、患者其後訴フルトコロナキトヲ以テ推スレバ、或ハ已ニ患者ノ注意ヲ惹カマシテ體外ニ出デシモノナランカ、將タ又更ニ尿道壁ヲ穿貫シ他ノ身體部分中ニ没シ去リシモノナランガ

予ハ茲ニ筆ヲ擱カントスルニ當リ、更ニ一辭ヲ費サントスルモノハ他ナシ

V. Hacker (1901)ガ會陰部尿道切開術ニ賴テ除去シ得タル硝子片ヲ患者ガ其過リ嚥下セシモノナルコトヲ語リシニモ係ハラヌ、之ヲ外尿道口ヨリ來レルモノト推定シ、患者ノ辭ヲ以テ自己ノ行爲ヲ蓋ハンガ爲ナリトナシタル

如ク、本患者モ亦或ハ此種ニ屬スルモノナラザルカノ疑問ニ就テハ、予モ亦想起シタルコト、及百方策ヲ盡シ、辭ヲ設ケ、其眞ヲ得ントカメシ結果ト、前上ノ事實トニ據テ此斷定ヲ下シタルモノナルコトヲ重テ明記セント欲スルナリ

予ハ此稿ヲ公ニスルニ當リ、此報告ヲ快ク允許セラレタル筒井教授ニ其好意ヲ謝シ、且ツ同教授及三輪教授ガ多クノ幫助ヲ給ハリタルニ對シテ、大ナル感謝ヲ表ハスモノナリ(完)

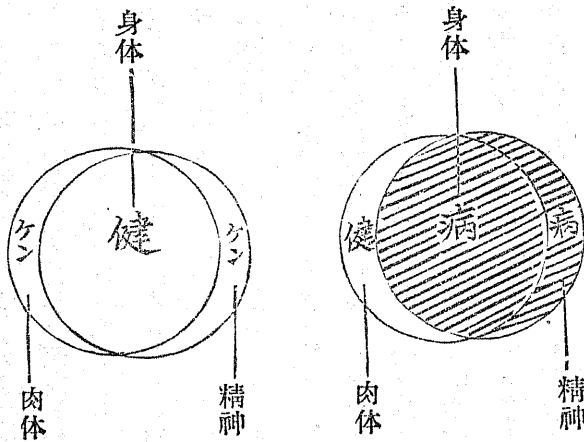
明治三十八年一月二十日

◎出征軍人精神衛生法

北村 徐雲

抑モ吾人ノ身体ハ精神ト肉体ノ兩者相合シテ成ルモノナリ隨テ疾病ニモ精神病ト肉体的疾患トアリ故ニ之ヲ未發ニ防遏スル衛生法ニモ精神衛生法ト肉体衛生法トアルヤ明断タリ矣然ルニ我邦維新前後一時歐米物質的學術ヲ輸入スルノ急ナルヤ從來我東洋ニ於ケル神儒佛三道ニ關スル諸書中散在セル精神衛生法ノ事項ハ頓ニ忘レタルカ如ク衛生法ヲ説クモノ單ニ歐米輸入ノ肉体的衛生法ノミニ

傾キ上ハ衣食住ヨリ下ヘ消化、呼吸血行、運動生殖器等ノ衛生法ニ偏シ尙一步ヲ進メテ之レニ神經系ノ衛生法即チ精神衛生法ヲ加ヘ兩者相合シテ過不及ナク之ヲ説クモノ稀ナルハ予ノ久シク遺憾トスル所ナリ何トナレハ吾人身体ハ下圖ノ如ク精神肉体ノ兩者ヲ含有シ而モ其一不健康ナレハ既ニ病者ノ部類ニ算入シ得レバナリ



古人曰ク健康ナル精神ハ健康ナル身体ニ舍ルト古人既ニ